発達理論の学び舎

Back Number: Vol 178

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2018

目次

3541. 三列目に運転席がある車と漫画を修正する夢

3542. スクリャービンの美しきピアノ曲

3543. 知の力

3544. 創造活動と探究活動が統合される日へ向けて

3545. 図書館で作業を手伝う夢

3546. 未来視を行う夢

3547. 亡き親友の絵を眺める夢

3548. 哲学探究の再開

3549. 夢から目覚めぬ人々：インテグラル理論と成人発達理論

3550. サッカースタジアムと肉の試食に関する夢

3551. 今朝方の夢の続き

3552. 思うこと

3553. 社会化された価値（虚構の価値）の変容に寄与しているとは思えない成人発達理論やインテグラル理論の枠組み

3554. 浅薄さの氾濫する現代社会

3555. 発達と美的感覚の変容

3556. 成田空港近くのトランクルームに行く夢

3557. 半年振りに人と会うことについて

3558. モネの絵画から得られた着想

3559. 充実感と幸福感のその先

3560. 精神の圧縮と解放

© YOHEI KATO 2018

3541. 三列目に運転席がある車と漫画を修正する夢

奇妙なシルエットが体育館の中で整列する夢を見た後に、夢の場面が変わり、私は急いで自宅に向かっている夢を見ていたことを思い出した。それは一つ前の夢とつながっており、体育館から外に出て、自宅に急いで帰る夢だった。

どうやら私は、家族と一緒に昼食を食べに行くことになっていたらしい。何も連絡をせずに当初の帰宅予定時刻を随分と過ぎてしまっていたように思えたので、父と母は苛立っているかもしれないと思った。

自宅に到着し、ドアを開けると、そこには両親が立っていて、ちょうど出発するところだった。私は一時間以上も遅れてしまったと思ったが、ふと時計を見ると、数分程度の遅れだった。そのため、両親も特に怒っている様子はない。ちょうど良いタイミングに帰ってきたという感じであり、私たちはそのまま一階に降りた。すると、突然雨が降り始めた。

雨に当たらないように、私たちは足早に車に乗り込んだ。すると、車の中が妙な作りになっていることに気づいた。まずは作りよりも、車の中の物の多さに驚いた。人が乗れる場所が極めて限られており、母は助手席に座り、私はその後ろの席に座った。だが、それ以外の席は全て荷物で埋まっていた。

母は愛犬を抱きかかえており、愛犬の後頭部だけが私の目に映っていた。父はどこにいるのかと思って探してみると、三列目の右のシートに座っていた。「誰が運転するのだろうか？」と思って前の運転席を見ると、そこは荷物で一杯で、人が座ることができそうにない。再度父の方を見ると、なんと三列目の右のシートが運転席になっていた。

父は全く問題ないというような表情を浮かべながら、三列目の席に取り付けられているハンドルを握り、車の運転を始めた。三列目から運転をするというのはとても奇妙であり、前の車との車間距離も含めて、随分と運転感覚が異なるだろうと思った。

雨が降りしきる中、車が何事もなく目的地に向かっていった。そこで夢の場面が変わった。

© YOHEI KATO 2018

最後の夢の場面では、私は自宅のトイレ掃除をしていた。そのトイレは取り外し式のものであり、便座も含めて、トイレが丸ごと地面から取り外すことができた。私はそれを風呂場で洗っていた。風呂場のドアを開けっ放しにしていたこともあり、向こうの部屋を見ることができた。すると、見知らぬ中年男性が床に寝っ転がって漫画を読んでいた。

仰向けになって漫画を読んでいたかと思ったら、今度は床に腹をつけて漫画を読み始めた。そうした動作を数分おきに行っていた。トイレ掃除がひと段落したところで、その男性に近づき、話しかけてみた。なにやら彼は釣り漫画を読んでいるようだった。確かに彼は床でゴロゴロしながら漫画を読んでいたが、その表情は真剣だった。

私:「随分と真剣に漫画を読んでいらっしゃいましたが・・・」

見知らぬ中年男性:「ええ、今コンテストに応募しようと思ってるんです」

私:「コンテスト？」

見知らぬ中年男性:「はい。既存の漫画を一つ選び、そのセリフを三箇所だけ絶妙に修正するコンテストです」

男性はそのように述べ、漫画のあるページを広げて私に見せてくれた。見ると、主人公の決め台詞が面白おかしく修正されていたり、登場人物の何気ないセリフが哲学的な意味を持つセリフに修正されていたりした。

見知らぬ中年男性:「こんなのもありますよ」

その男性は別のページを広げ、大物の魚と格闘している主人公がリールを一生懸命に巻いている時の擬音語が別の擬音語に変わっており、主人公の真剣な表情とは対照的に、その擬音語はとても間の抜けた効果をもたらしていた。私はそれを見て、思わず吹き出してしまった。

私:「これは面白いですね～」

見知らぬ中年男性:「あなたもやってみますか？」

© YOHEI KATO 2018

そのように男性は述べ、その釣り漫画の続きの巻を私に渡してくれた。厳密には、その釣り漫画は週刊漫画の連載であったから、新しい号の週刊漫画を手渡してくれたと述べた方がいいだろう。私は、街中を流れる川の上に掛かっている橋の上に主人公が立っているシーンを眺め、何か面白い修正ができないかを考えていた。そこで夢から覚めた。フローニンゲン：2018/12/18（火）07:50

3542. スクリャービンの美しきピアノ曲

気がつけばあともう少しで昼食どきだ。今日も薄い雲が空全体を覆っており、太陽の姿を拝むことができない。ここのところ天気が優れない日が多く、太陽の光を浴びることがほとんど無い。日本の梅雨の時期でも少しは晴れ間が見える日があるのだが、ここ最近のフローニンゲンは本当に曇ってばかりだ。明日から一週間ほどさらにこうした天候の日が続く。

それにしても今日はいつも以上に辺りが静かだ。そして、自分の内面世界もとても静かだ。常に自分の内側に留まっている感じがする。自分の内側に静かにくつろいでいると、静かな喜びが滲み出してくる。

外は寂寥とした雰囲気を放っており、今日は、自分の内側から滲み出してくる喜びに浸って活動を進めていくことが賢明なようだ。

早朝から、スクリャービンの曲を聴き続けている。12時間を越すピアノ曲全集を今日全て聴き、明日も繰り返し聴こうと思う。というのも、改めてスクリャービンの曲を聴いてみると、極めて美しい曲が多いことに気づいたからだ。これまで私は、スクリャービンという人物は不思議な響きを持つ曲を書く作曲家だという思い込みを持っていたが、どうもそれは限定的なものの見方だったようだ。

午前中に彼の曲を聴いていると、スクリャービンは熱心にショパンの曲を参考にしていたことがわかるエチュードを発見した。その曲は特に美しく書斎の中に響いていた。スクリャービンの曲に感化されるものがあり、モスクワにあるスクリャービン博物館にいつか足を運んでみようと思う。そこから北西に100kmほど行ったところにチャイコフスキー博物館もあるため、モスクワを訪問した際には、ロシアが生んだ偉大な二人の作曲家の博物館を訪れたい。残念ながら、ラフマニノフはアメリカに亡命をし、二度と祖国の地を踏まなかったためか、ラフマニノフ博物館ないし記念館の類はロシアにはないようだ――簡単に探してみると、世界中のどこにもそれらしきものはない。

午後からは、スクリャービンの曲に範を求めて一曲作ってみようと思う。スクリャービンのピアノソナタ全集、さらにはピアノ小作品集に関する楽譜は以前に購入していたが、これまでまだ一度もスクリャービンの曲を参考にしたことがない。早朝に改めてスクリャービンの曲の良さに気づくことができたのは、スクリャービンの音楽を参考にする機が熟したからだと言えるかもしれない。午後からの作曲実践でどのような発見事項があるか、今からとても楽しみだ。フローニンゲン：2018/12/18（火）12:01

3543. 知の力

時刻は午後の七時を過ぎた。たった今、夕食を摂り終えた。これから就寝までの時間を使って、今日一日を締めくくる探究活動と創造活動に従事する。

先ほど、音楽理論に関するポッドキャストを聞きながら夕食を摂っていたところ、改めて「知は力なり」という言葉を実感していた。今学習している音楽理論のみならず、発達理論や他の理論的な枠組みしかり、そうした理論化された知の恩恵を日常至るところで実感している。それは単に仕事の上で力を発揮するだけではなく、やはり私たちの生活と人生を深めることに寄与してくれるようだ。どのような分野でも卓越の境地に至っている人たちが存在しており、彼らは学ぶことをやめようとはしないという共通点を持っているように思う。それは知の力を知っているのみならず、知というものが、さらに深い世界の扉を開く鍵であると認識しているからだろう。新たな知を獲得し、さらに深い世界に入っていき、そこで再び新たな知と出会う。その連続的なプロセスが学びの本質にあるように思えてくる。

本日をもって、作曲理論のテキストのまとめノートの作成が終わった。それが完成するまで多くの日数を要したが、振り返ってみるとあっという間だったようにも思う。日々小さく学習を積み重ねていき、ふとした瞬間に振り返ってみると、自分が着実と学びを進めていたことがわかる瞬間がある。そして、その瞬間には、学びに伴う充実感のようなものを味わうことになる。

今日をもって無事にまとめノートが完成したため、明日からはそれを何度も繰り返し読み返していく。最低でも三回ほど間隔を置かずに読み返していく。ノートに記載した諸々の譜例は、逐一MIDIキーボードを用いて音を出しながら確認していく。手作りのこのまとめノートを三回繰り返し読んだ時、作曲理論の基礎的な知識が随分と身についているだろう。それは作曲実践に足るような知識であってほしいし、そのような知識にしていくように心がける。

作曲理論のテキストを読み終えたため、夕食前から、久しぶりに英語の文献を読み始めた。およそ10日間、ないし二週間ほど英語の文献から離れていたように思う。先ほどから読み始めていたのは、ジョン・デューイの“Art as Experience (1934)”である。久しぶりに英語の文献を読むと、英語の文字がとても親しみのあるように思われ、それを読んでいると、英語がもはや母国語であるかのような安心感があった。

明日からは、10日前の生活、ないしは二週間前の生活に戻るかのように、大量の英文を読んでいく。デューイの書籍は明日中に一読を終えるかもしれない。そうすれば明後日からは、アメリカの教育哲学者エリオット・アイスナーが執筆した、芸術教育に関する書籍を読み進めていく。ここからは教育哲学の探究に戻り、それと並行して作曲理論の学習と作曲実践を行っていく。この長い冬を抜ける時までに、作曲理論の基礎を固め、そして今よりも少しでも作曲技術が向上していることを願う。
フローニンゲン：2018/12/18（火）19:28

3544. 創造活動と探究活動が統合される日へ向けて

今日はこれからバルトークの曲を参考にして作曲実践を行おうと思う。ここ最近は、作曲理論のまとめノートを作ることに集中していたため、一日に二曲作ることで精一杯であった。しかし今日からは少なくとも毎日三曲ほど作っていきたいと思う。もちろん、作成したまとめノートを何度も読み返すことを最優先にするが、作曲実践を以前の時の量と同じぐらいにしたいと思う。

とにかく毎回の作曲で様々な実験を試みるため、作曲実践が一つの実験工房のような場として機能しているようにすら思える。これからは、発達科学や美学や哲学などの知見を曲の中に活かしていくことを強く意識したい。そうすれば、日々の探究活動と創造活動が完全に一体のものとなるだろう。それらが分化している現時点においては、まだ道半ばであることを自覚しておく必要がある。これから少しずつ、毎日の探究活動が創造活動に影響を与え、逆に創造活動が探究活動に影響を与えるようになってくるだろう。両者の垣根は徐々に消えていき、いつかそれらが統合される日が来ることを願う。

明日からは、ジョン・デューイやエリオット・アイスナーなどの教育哲学書の書籍を読み進めていくが、それらに加えて、ゴッホの手紙も読み進めていきたい。全集に収められた手紙をまだ全て読んでお

らず、この冬はそれらをゆっくりと読み進めていきたいと思う。ゴッホは、基本的に独学で絵画の製作法を学んだ。そうしたゴッホを規範としたい。ゴッホの手紙を今年の冬から読み進めていけば、知らぬ間に春がやってくるだろう。

近い将来、日記を執筆する以上に毎日曲を生み出している自分が存在しているかもしれない。むしろ、そうした日々がやってきてほしいと思う。言葉を超越した世界の中にある自己を見出し、それが生み出す光や闇などの諸々の感覚を曲として形に残しておきたい。とにかく形にし続けていくこと。形にする行為から新たなことを学び、形になったものからも新たなことを学んでいく。形を生み出し続けることと、学び続けること。それらは不可分のものであり、同時にそれらは自分の人生にとって不可欠のものである。

時刻は午後八時を迎えようとしている。今日は夕方に少しの間だけ夕日が見えた。わずかの時間ではあったが、太陽の光を見ることができてとても暖かい気持ちになった。

多くの闇と少しの光。冬の時代はわずかな光がとても貴重であり、それが日々の生活に大きな希望をもたらしてくれる。フローニンゲン:2018/12/18(火)19:53

3545. 図書館で作業を手伝う夢

今朝は五時前に起床し、五時半から一日の活動を始めた。昨日の就寝時間がいつもより早かったため、今朝は普段よりも幾分早く就寝した。

今日は小雨がぱらつくような天気らしい。食料を切らしてしまったため、昼前に近所のスーパーに買い物に行こうと思う。

いつもながら早朝のこの時間は、まず昨夜の夢を振り返ることにしたい。夢の中で私は、ある小さな図書館の中にいた。それは学校の図書館ではなく、街の図書館のようだ。私はそこで本を読んでいたのではなく、ある中年男性の仕事の手伝いをしていた。その男性は、誰かからの依頼を受けて、その図書館の隅に歴史的な資料を展示することを行っていた。それらの資料は貴重な文献や小物で構成されていた。

その男性は、いくつかの資料をひとまとめにし、まずは図書館の入り口付近の壁にそれらを陳列し始めた。最初私はそれらをただ眺めているだけであり、どのように資料を展示すればいいのかを観察していた。その男性はどこかからサランラップを持ってきて、ラップの両隅を壁に貼り付ける形で展示資料を覆い始めた。どうやらそのように資料を展示するらしい。

サランラップはおそらく保護の役割を果たすのだろうが、なぜサランラップなのかは不明だった。資料の横幅が意外とあったため、その男性は右隅に手が届かないようであり、そこで私は手を貸した。私がサランラップの右端を壁の右隅に取り付けると、「よし完成」といった表情をその男性は浮かべた。

中年男性:「それでは、続きは午後にしましょうかね。一日に二つずつ資料を展示していきましょう」

私:「午後に一つですか？今日中に全ての資料を展示できると思うのですが・・・」

中年男性:「何も焦る必要はありませんよ。ゆっくりやっていきましょう」

中年男性はそのように述べた。私はどう見ても、この作業は一日で終わると思っていたのだが、その男性は一週間ほどかけてその作業を行おうとしているらしかった。そこでふと図書館内を見渡すと、遠くの方に、書籍が地面に積み重ねられている光景を目にした。その男性は昼食を摂りに図書館から出て行ってしまったので、私は積み重ねられたその書籍の方に近寄って行った。するとそこで、見知らぬ中年女性と大学教授のような人がその場に現れた。

大学教授のような人:「おっ、資料の展示が着々と進んでいるな」

見知らぬ中年女性:「そのようですね」

大学教授のような人:「結構なことだ」

見知らぬ中年女性:「そういえば、うちにはガスコンロがなくて困ってるんです」

女性がそのように述べたとき、私はその大学教授が女性の家のガスコンロを取り外したことに直感的に気づいた。

大学教授のような人:「ガスコンロは危ないよ。そんなものは必要ない」

見知らぬ中年女性:「でもコンロで料理がしたいんです・・・あれっ、この棚はなんですか？」

みると図書館の隅に食器棚のようなものがあった。すると、大学教授のような人は何か観念したかのような表情を浮かべた。

大学教授のような人:「実はここにコンロ鍋があるんだよ。しょうがない、これを持って行きなさい」

見知らぬ中年女性:「いいんですか？ありがとうございます。これで焼きそばが作れます～」

女性がそのように述べたとき、「コンロ鍋で焼きそばを作る？」と、私は一瞬考えた。もちろん、それは不可能ではないし、美味しく作れるのだろうが、どうして最初に作りたいものが焼きそばなのかが私にはわからなかった。そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2018/12/19(水)06:01

No.1490: An Imaginary Clock-Tower

I can perceive a “running” clock-tower on a dark night. Given that time and my life run, I might be able to feel that both of them are at a standstill. Groningen, 20:46, Wednesday, 12/19/2018

3546. 未来視を行う夢

夢の続きについて改めて思い出している。図書館で作業を手伝った後、私は図書館を後にして、近所を散歩していたのを思い出した。すると図書館のすぐそばの道端で、60代半ばであろう男性が寝転がっている姿を目にした。手には一升瓶があり、どうやら酒を飲んでそこで泥酔してしまったようだ。

その男性に少し目をやると、その男性はふと目を覚ました。しかし、私の存在に気づいていないようだ。その時私は、夢の中に自分が存在しているという身体感覚はありながらも、肉体としての身体はそこにないようだった。端的には、エネルギー体と意識だけがそこにあり、他の人から私の姿は見えないようだった。そのような気づきを得た瞬間、先ほどまで図書館にいた中年女性がその男性に声をかけた。

女性:「お父さん、こんなところで何してるの！全くもう、いい歳してこんな場所で酔っ払っちゃって」

どうやら二人は親子のようだ。よくよくその男性の顔を見ると、確かに二人は似ていないくもない。どうやらその男性は現在妻と別居中のようであり、何かやけを起こして酒を飲んでしまったようだ。その男性の格好は幾分浮浪者のようであった。

女性は男性の体を起こし、色々と話しかけている。その男性は酔いが少しずつ冷めてきたのか、徐々に話ができるようになっていった。二人のやり取りを見ていると、私はそこから時間軸だけが移動するかのように、今後の二人の行く末について未来視ができた。幸いにも、まずはその男性は妻と復縁し、その後幸せに生活をし始めたようだった。

その男性と妻が微笑む写真が脳内に現れた。どこか田舎の家の軒先で二人で撮ったその写真は、幸福と哀愁の入り混じるような感情を私に喚起させた。その写真を眺めていると、実はその男性は元大学教授であり、80歳を過ぎて妻よりも先にこの世を去ったことがわかった。その後、妻も夫を追う形で数年後にこの世を去ったようである。そして、その娘の女性はその時40歳であり、30歳年の離れた70歳の男性と結婚し、翌年に女の子を出産したことがわかった。一枚の写真を眺めながら、そのようなことが次々と読み取れた。

そこで突然私は我に返ったように、図書館近くの道端に立っていた。そういえば、これから映画館に向かおうとしていることを思い出した。少しばかり早歩きで近くのバス停に行くと、そこに母が立っていた。私たちは偶然同じ方向に向かう用事があったので、私はバスを待ちながら母と会話をしていた。

すると、一台、また一台とバスが通り過ぎていった。私は自分が乗るバスがどれだか厳密に把握しておらず、携帯を開いてバスの番号を確認した。どうやら次のバスに乗ればいいらしい。それがわかった瞬間に、母はもうその場いなかった。「78」あるいは「94」のバスに乗ればいいらしく、バス停から左を眺めると、94番のバスがやってきた。バスの扉が開き、私はバスに乗り込み、チケットを運転手に見せた。その運転手は日本人の男性だった。

運転手は丁寧な言葉でお礼のような言葉を一言述べた。だが、私の後ろにやってきた男性に対しては少々異なる態度を取り始めた。どうやら、その男性はタダ乗りを試みたようだ。そのため、運転

手は丁寧語ながらも厳しい口調で、罰金を含める形で高額なチケット料をその男性に要求した。その男性は渋々その金額を支払った。問題はその場ですぐに解決したようであり、席に着いてその様子を眺めていた私は別のことを考え始めた。「そういえば、今から何の映画を観る予定だったけ？」と思った瞬間に、私はドラえもんの――厳密にはのび太の――部屋にいた。

そこには誰もおらず、部屋の真ん中にサッカーボールぐらいの大きさの小さなバランスボールが置かれており、その上に一通の手紙が添えられていた。すると、窓際にどこでもドアが現れて、ドラえもんが部屋に帰ってきた。

ドラえもん:「ん？何だろうこれ？」

ドラえもんはバランスボールの上に置かれた一通の手紙を手に取ることはなく、ただそれを眺めていた。その時私は、その差出人は未来のドラえもんであることに気づいた。だが本人はまだそれを知らないようだ。

ドラえもん:「まぁいいか。あっ、早く行かなくちゃ」

そのようにドラえもんが述べると、再びどこでもドアからどこか別の場所に出かけて行き、ドアがスッと消えた。すると、私もその部屋からスッと消えた。フローニンゲン:2018/12/19(水)06:30

No.1491: A Voice Falling Down on a Desolate Land

Several white gulls are flying in the sky. When they fall down on the ground, a voice seems to go down from the heaven to the earth. Groningen, 09:23, Thursday, 12/20/2018

3547. 亡き親友の絵を眺める夢

時刻は午前六時半を迎えた。辺りはまだ真っ暗である。今朝は五時に起床したおかげもあり、一日の活動に従事する時間が十分にあることを嬉しく思う。今日も充実した探究活動と創造活動が行えるだろう。つい先ほど、一日分のコーヒーを入れ始めた。コーヒーメーカーがゆっくりとコーヒーを作っている。その音を聞きながら、先ほど振り返っていた夢について再度思い出していた。

細かな話だが、夢の中で現れたバスの運転手は日本人だったが、あのバスが左ハンドルであることを考えると、あの場所は日本のようでいて日本ではない場所だったのかもしれないと思う。夢の中でそうした日本的なものと外国的なものが混ざり合っている様子を見ると、どこかそれは自分の精神生活をそっくりそのまま反映しているように思えなくもない。

そうしたことを考えていると、その先にあった夢についても思い出した。夢の中で私はある体育館にいた。そこはとても綺麗な体育館であり、広々としている。その様子を見る限り、そこは学校の体育館ではなく、市の総合体育館のようだ。私は一人でシュート練習を行っていた。

しばらくすると、中学時代のバスケ部のメンバーが体育館にやってきて、今から練習を始めようと言う。私はキャプテンでありながらも、その時は体調不良であったため、代わりに副キャプテンの友人に今日の練習の取りまとめを任せた。なぜだかわからないが、私は少し走ると急に疲れが出るような状態になっており、別メニューで調整をし始めた。激しい動きを極力避けるため、私はゴール下で簡単なシュート練習を何度も繰り返していた。

すると、体育館のもう一面のコートに二人の友人がいることに気づいた。彼らもバスケ部のメンバーなのだが、私と同様に、別メニューで調整を行っていた。二人に話しかけたところ、そのうちの一人が私のボールを見て、「空気が随分抜けてるね」と言った。そこで初めて私は、自分のボールに空気が足りないことを知った。

親切にも彼は空気入れを差し出してくれ、一緒になってボールに空気を入れた。そこで夢の場面が変わった。最後の夢の場面では、私はある友人の絵を眺めていた。彼は若くしてこの世を去った私の親友である。彼は私に、一枚の絵を差し出した。

親友:「この絵、かっちゃんに見て欲しいんだ」

私:「えっ？」

親友:「絵のコンテストに応募したいんだよ。その前にちょっとコメントをお願いできないかな？」

私:「うんいいよ」

彼は絵のコンテストに応募するために一枚の絵を描き上げたようだ。その絵を受け取って眺めた時、画用紙がいくつかの区画に分けられており、彼はそれぞれの区画に自分の思い出を描いているようだった。見るとそこには、家、海、公園、学校など、様々な場所が描かれていた。私はそれらのどの場所にも見覚えがあり、どれも全て懐かしさの感情を私に引き起こした。

その絵は、彼の思い出が詰まったものでありながらも、同時に私の思い出が詰まったものであるように思えた。他の人がこの絵を見ても何も感じないかもしれないが、私にとって彼の絵はとても感動的な絵であった。私は彼の絵をしばらくじっと見つめ、コメントの言葉が少し浮かんだところで絵から目を離し、彼にコメントを伝えようとした。すると、彼はもうその場にいなかった。フローニンゲン：2018/12/19（水）06:51

No.1492: Until My Sorrow Vanishes

I imagined that I would continue to create something until my sorrow vanishes. I'll start to read "Empowering Education: Critical Teaching for Social Change (1992)" in the afternoon.
Groningen, 11:52, Thursday, 12/20/2018

3548. 哲学探究の再開

目の前の景色に対して何を述べたとしても、それが突然変わることはないのだが、とにかく闇だ。あるのは闇だけ。確かに街灯がポツリポツリと光っているのが見えるが、とにかく闇だ。起床して二時間経つが、起床した時と変わらない闇の世界が目の前に広がっている。

昨夜就寝前にふと、シュタイナー教育の思想、特に芸術教育に関する思想を、様々な哲学的枠組みから探究していくことに着手したいと思った。その考えを机の上の裏紙にメモをしてから就寝に向かったのを覚えている。

今日から再び、哲学的な探究を再開させる。作曲理論に関するテキストのまとめノートが昨日完成したため、今日からは再び哲学書ないし哲学に関する論文を読んでいくことができる。昨日から、ジョン・デューイの"Art as Experience (1934)"の気になる章から読み始め、二つの章を読んで昨日の読書を終えた。今日はその続きを読んでいく。デューイの書籍を読んだ後に読みたいものとして、イ

ンナ・セメツキーの“Jung and Educational Theory (2013)”とエリオット・アイスナーの“Reimagining Schools (2005)”“The Kind of Schools We Need: Personal Essays (1998)”、さらにはイラ・ショーの“Empowering Education: Critical Teaching for Social Change (1992)”の四冊がある。先ほど、それらを書斎の机の上に置いた。

シュタイナー教育の思想を探究の中心に据え、特にその芸術教育思想に注目をしていく。その際に、教育哲学の様々な枠組みのみならず、他の哲学領域の枠組みを活用して探究を進めていきたいと思う。探究の成果がどのような形を伴ってまとまっていくのかはまだ不明だが、今の自分の関心はそうしたところにあると言える。

今日は午前中に、協働者の方たちとの勉強会がある。それ以外の時間はすべて探究活動と創造活動に時間を充てたい。まずはこれから早朝の作曲実践に取り掛かる。今日からはとにかく旺盛に作曲実践を行っていきたいと思う。

作曲上のパターンをとにかく増やしていくことが重要だ。リズム・メロディー・ハーモニーを含め、作曲で必要とされる様々な要素のパターンを獲得していく。そのためには兎にも角にも実践が不可欠であり、実践を通じた内省が大切になる。そして、実践をより有意義なものにしていくために理論の学習が不可欠である。

今日からは、作成したまとめノートを何度も繰り返し読んでいくことにする。一つ一つの項目を理解しながら、そして実際に自分の手で音を鳴らしながら、それらを身体知の次元にしていく。それらの知識が自由自在に作曲実践の中で活用できるようになれば、今とは一段次元の違う作曲技術を獲得したことになるだろう。哲学の探究、そして作曲技術の向上に向けた活動に従事しながら、休憩として今日はモネの画集を眺めようと思う。フローニンゲン：2018/12/19（水）07:09

No.1493: A Waltz of Cold Rain

It began to rain a couple of minutes ago. Today is cold especially for the part below my ankle. Groningen, 17:33, Thursday, 12/20/2018

3549. 夢から目覚めぬ人々：インテグラル理論と成人発達理論

時刻は午後の五時を過ぎた。今から一時間ほど前に、少しの時間だったが、夕日の輝きを拝むことができた。今日は一日を通して曇り空であったから、そうしたわずかばかりの時間でも、太陽の輝きを見れたことは喜ばしいことであった。

つい先ほど、ジョン・デューイの“Art as Experience (1934)”の初読を終えた。いくつか感銘を受ける発想があり、それらに下線を引き、自分の考えを書き込んでおいた。再読する際には、特に音楽と経験に関する記述を中心に読み返していこうと思う。明日は、イラ・ショーの“Empowering Education: Critical Teaching for Social Change (1992)”を読み始める。タイトルにあるように、本書は社会変革を実現していくための教育とは何かを考察する内容になっている。九つの章から本書は構成されており、そのうちの五つの章は特に自分の関心を引く。明日はまず、それらの章を中心に読んでいくことにする。

来月末にはいよいよ『リーダーシップに出会う瞬間』というタイトルの共著が出版され、その数ヶ月後にはケン・ウィルバーの監訳書籍が出版される。どちらの書籍も世にどのように受け入れられていくのかが今から楽しみだ。

ウィルバーの書籍の監訳の仕事は、来年の二月頃から本格的に取り組むことになるだろう。ウィルバーが提唱したインテグラル理論にせよ、現在日本の社会で少しずつ普及し始めている成人発達理論というのは、究極的には私たちが現在見ている夢から目を覚ますためにあるものだと考えている。だが、今からおよそ10年ほど前にインテグラル理論が日本に紹介された時には、そもそもこの理論が社会に知られることはほとんどなく、成人発達理論に関しては、その存在が徐々に世に知られ始めているとはいえ、結局のところ、その活用は既存の夢を強化することに留まる。

今年の初旬に『ティール組織』という書籍が日本でよく読まれていたという話を聞くが、本来ティール組織の根幹にある理論モデルはインテグラル理論や成人発達理論であるにもかかわらず、既存の夢から人々が目を覚ます形でティール組織の枠組みが活用されているとは到底思えない。こうした状況は別に日本に限ったことではないのだが、翻訳文化が発達し、さらには無意識的な欧米コン

プレックスを抱える日本においては、そうした外来思想の受け入れ方が浅薄であることがやはり目に付く。

ティール組織の枠組みを活用する実践者が、その根幹にあるインテグラル理論や成人発達理論（具体的にはスパイラルダイナミクスの理論）を学んでいるようにはあまり思えず、仮にインテグラル理論や成人発達理論を学んだとしても、そこからさらに発達理論に関する理解を深めていこうとする実践者はごく稀なのではないかと思う。

今回、ウィルバーの書籍を監訳することになったが、それが多くの人々の動物的な反射・反応の餌食になることは避けたいものである。また、ウィルバーの思想が本質的に持つ「既存の夢から覚めること」という点をどれだけ伝えていくことができるかも大切になるだろう。

ここ何年も、私はいくつかの日本企業と協働プロジェクトを行っているが、それを続けているのは、あえて夢に縛られた企業社会に自己を置き、人々が目覚めることに関与しようという意思があるからだろう。自分が夢を見ていることに気づけないことほど厄介なことはないが、人々が夢から目覚めることに関与していくことはこれからも続けていくだろう。フローニンゲン：2018/12/19（水）17:42

3550. サッカースタジアムと肉の試食に関する夢

今日は六時過ぎに起床し、六時半を迎えた頃に一日の活動を始めた。闇の中、通りを走る車の音に耳を澄ませてみると、水しぶきを上げている音が聞こえる。どうやら昨夜は雨が降ったようだ。また、つい先ほども少し小雨がぱらついていた。今日も一日を通して天気があまり優れないらしい。

起床直後に、今朝方の夢について思い出そうとすると、すでに記憶が薄れていることに気づいた。しかしそれでもなんとか夢を思い出そうとしてみると、少しばかり記憶が蘇ってきた。記憶の糸をたぐり寄せる形で、今朝方の夢について書き留めておきたい。

夢の中で私は、日本のサッカーチームと海外のサッカーチームが戦う試合を観戦していた。厳密には、試合そのものを見ていたというよりも、そのハーフタイムにスタジアムの周りを散策していたと言った方が正確だ。二つのチームは両国を代表する名門チームであり、試合は相当白熱したものになっ

ていたのだということを、スタジアムの雰囲気から感じ取った。私は、スタジアムの地下にある駐車場に降りていき、そこから観戦スタンドに上がっていこうとした。

見ると、駐車場には様々な車が停まっており、何台かの車の中に、先ほどまで試合をしていた日本のサッカーチームの選手たちが休憩をしていた。彼らはすごい汗をかいており、試合の激しさを感じさせた。彼らは自分の車の中で水分補給をしていた。一人一人の選手は自分の車の中で休んでおり、他の選手と会話をするような選手は一人もいなかった。

彼らは一言もしゃべらずに、どこか呆然とした表情で水分補給を行っていた。ハーフタイム中はロッカールームで休憩するものだと思っていた私は、その光景に少し驚いた。そして、彼らの様子を見ていると、それは幾分異様な光景のように思えた。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は高原の宿泊施設にいた。そこには研修ルームやフットサルコートなどが付いていた。私は研修ルームの部屋の中にいて、周りを見ると、そこには中学校時代のクラスメートがいた。どうやら、主要五科目の定期試験がこれからあるらしい。

私は一切勉強しておらず、試験を受けることに気乗りはしなかったが、勉強をほとんどしなくても問題は解けるだろうと高を括っていた。だが、周りにいる友人たちが話す内容を聞いていると、特に社会の試験に関しては若干懸念があった。というのも、試験範囲となっている分野の用語を漢字で書くことはできないだろうと思われたからだ。すると、社会の先生がやってきて、問題用紙を配り始めた。

私はギリギリまで手持ちの資料集を眺めていたが、その場で全ての漢字を覚えるのは至難の技であった。資料集をしまい、試験が始まると、先生は不思議な問題を出題してきた。

社会の先生:「ここに六種類の肉があります。今から目隠しをしてそのごくわずかな部分を試食し、それが何の肉かを回答用紙に書いてください」

先生はそのように述べると、生徒は皆目隠しを始めた。試食する肉は各列で異なるだけではなく、前後の人も異なる肉を食べるように配慮がなされていた。これはなかなか難しい問題のようであり、周りの生徒は大雑把に肉の分類はできるが、そこからこまかな分類をしていくことが難しいようだっ

た。私も目隠しをして問題に回答しようと思った時に、廊下の方から「問題を解く前に、もう一度全ての肉を試食できますよ～」という女性の声が聞こえてきた。

私が問題に回答するまでにまだ時間があるようだったから、友人と一緒に廊下に出て行き、その女性に試食をお願いした。見るとその女性は、中南米出身の方であり、日本人ではなかった。私は彼女から肉の一部をもらい、それを試食した。横にいた友人も同じ肉を試食し、「これはOOOOOOOOOOという肉ですか？」と聞いたことのないような、長いカタカナの名前を述べた。すると、肉を差し出した女性は幾分微笑みながら、「さて、どうでしょう」と一言だけ述べた。そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン：2018/12/20（木）07:15

No.1494: A Moonlight's Run

The fact that today is ending implies that tomorrow is approaching. I look forward to tomorrow, following a moonlight's run. Groningen, 21:06, Thursday, 12/20/2018

3551. 今朝方の夢の続き

一向に明ける気配を見せぬ闇に包まれた辺りを眺めていると、それでも人々が少しずつ活動を始めている様子が見える。時折自動車や自転車が通りを過ぎていく。

先ほど今朝方の夢について思い出していると、あの夢にはもう少し続きがあったことを思い出した。社会科の試験を受ける際に、六種類の肉を試食し、それが何の肉かを当てる問題が出された後、いつの間にか社会の試験は終わっていた。次の科目は数学のようであり、周りの友人にどのような分野の問題が出題されるのかを直前に聞いてみた。すると、それは特に勉強をするような分野ではないことがわかり、試験問題を解くことは簡単だろうと思った。

続く英語の試験に関しても、対策としての学習は不要であると思っていた。気がつけばいつの間にか試験が終わっていて、生徒は皆解放されたような表情を浮かべている。そこは研修ルームのみならず、フットサルコートが屋外に設置されている宿泊施設であり、友人たちはフットサルコートに向かっていった。私はもうしばらく教室に残り、先ほどの試験とは関係のない資料を開き、何かを確認して

いた。その資料は自分の関心領域に関するものだったが、今となってはそれが何の資料だったかは覚えていない。もしかしたら音楽に関するものだったかもしれない。

資料をしばらく眺めた私は、フットサルコートに行き、みんなが楽しそうに行っているフットサルに混ぜてもらうことにした。フットサルコートではすでに試合が始まっており、試合に参加していない人たちはフェンス越しに外から試合を眺めていた。

私はコート内のベンチに荷物を置き、少々準備体操をしてから試合に参加した。試合に参加してみると、自分の重心がどうも高いように思えた。私はペナルティーエリア付近でポストプレーをする動きを再三取るのだが、自分にはなかなかボールが回ってこない。チームメートは、後ろの方でボールを回し、サイドに展開するのはいいものの、相手が嫌がるエリアに縦のパスを入れてこない。

そうした状況がしばらく続いたので、私は動きを変えて、ペナルティーエリア付近から離れ、右サイドに張るようにした。すると、ようやく私の元にボールが回ってきた。だが、重心が高いために、足元でボールを扱うことが幾分おぼつかなかった。「これでは相手にボールを取られてしまう」と思いながら、なんとか重心を低くして、小刻みなボールタッチができるように調整をしていった。そうした調整をしていく中で試合の時間は過ぎていき、いつの間にか夢が違う場面に変化していた。今朝方はそのような夢を見ていた。

起床直後には、あまり夢の内容を覚えていないと思っていたが、いざ書き出してみると、意外と覚えていたことに驚く。夢日記をほぼ毎日綴っている日々が続いている。今何日間ぐらいこれが続いているのか定かではないが、今までにないほどに、毎日夢を見て、しかもそれを文章の形にしている。

意識の成熟が進むという現象は、何も顕在意識下における現象だけではなく、無意識にも当てはまる現象なのかもしれない。無意識の世界にも発達現象があり、それが発達すればするだけ、顕在意識とより密接なつながりを持ち、顕在意識下で夢の内容を想起することが行いやすくなっていくのかもしれない。そのようなことを考えさせられる日々が続く。フローニンゲン：2018/12/20（木）

07:35No.1495: The Early Morning Like a Smooth Curve

The rain that has started since the early morning calmed down. I'm feeling a sense of a smooth curve at this moment. Groningen, 09:25, Friday, 12/21/2018

3552. 思うこと

昨夜から今朝にかけて色々と思うことがあった。結局、自分はこの人生を通じて、この世界にいかに関与していくことができるのだろうか、という問いに関するものだった。そうした問いに向かわせた具体的な事柄についてはここでは書かない。だが、ある一件がきっかけになり、自分はいかに日々を生き、いかにこの世界に何かしらの貢献を果たしていくことができるのかについて考えさせられていた。

早朝に、その件に関して少しでも役に立つことができるのであれば、という思いから一つ行動を取った。実際には、同種の問題が二件ほど存在しているようであったから、二つの件に対して同様の行動を先ほど取った。

今、再び書斎の向こうに広がる闇の世界を眺めている。午前八時を過ぎ、ようやく空がダークブルーに変わり始めた。夜が完全に空けるのは後30分ほどだろうか。

今日も私は自分の人生のある一日を生きて行く。これまでは、充実感や幸福感を絶えず感じながら日々を過ごしてきたが、もしかすると、充実感や幸福感すらも超越した状態の中で日々を生きて行く必要があるように感じている。この世界に真に関与していく際に、どうしても充実感や幸福感だけでは語られぬ感情が存在していることに気づく。それら諸々の感情を含め、新たな感情エネルギーが自分に流れる必要があるように思えてくる。

人の人生には限りがあり、自分ができることにも限りがある。そうした中で、自分はこの人生に何を与えられ、そして何に取り組むことが一つの役割として与えられているのかについて内省を続けていく必要がある。おそらく、その内省に終わりはないのだと思う。今日も読むこと、書くこと、作ることに従事していく。自分にできるのはそれぐらいしかないのかもしれない。逆に言えば、それをこの世界へ

の関与の一環として行うようにし、実際にそれが何らかの関与につながるようにしていく必要があるように思えてくる。その道をゆっくりと歩いていこうと思う。

これから行う早朝の作曲実践において、バッハの四声のコラールを参考にする際に、テンションをコードにうまく入れていく実験をしたい。得てしてこれまでの私は、三和音の音に囚われてしまうことが多く、そこにテンションとなる音を付加することにためらいがちであった。これから行う作曲実践では、ベースのパートに根音を任せ、他の三つのパートにおいて、アボイドとなる音を避けながら、テンションをうまく入れていくようなことを試みたい。今日もとにかく作曲実践を積み重ね、作曲理論に関する学習を行っていく。

自分には本当に読むこと、書くこと、作ることしかない。だが、それしかない人生も、ある一人の人間の尊い生き方なのだと言えるかもしれない。フローニンゲン：2018/12/20（木）08:17

No.1496: A Shrill Voice of a Drizzle

It continues to drizzle. I have an opportunity to see a person today, which is a rare occasion for me. Groningen, 10:58, Friday, 12/21/2018

3553. 社会化された価値（虚構の価値）の変容に寄与しているとは思えない成人発達理論やインテグラル理論の枠組み

時刻は午後の三時を迎えた。仮眠を取ってから、“Empowering Education: Critical Teaching for Social Change (1992)”を読み始め、今ちょうど昨日印を付けておいた数章を読み終えた。本書を読みながら、改めて教育において学習内容そのものが政治化されていることについて考えていた。初等教育しかり、高等教育しかり、カリキュラムのコンテンツに何を含めるのか、何を除外するのかが強く政治化されていることに気づく。

私はこれまで日米蘭と三つの国で教育を受けてきたが、各国の持つ思想・文化は学習コンテンツに大きな影響を与えていることに気づく。私がアメリカやオランダで学びを得たのは大学院レベルのものであるが、そこで取り扱われているのは普遍的な学術知識であったとしても、やはり学習コンテンツがその国の思想や文化に影響を受けていることは否定できない。これは確かに、その国でし

か学べないことがそこにあるという固有性に関しては価値ある側面なのかもしれないが、逆に言えば、ひどく限定的な教育がそこで施されてしまう危険性を秘めていると解釈することもできる。

いかなる場所で学びを得ようとも、その場所が立脚する思想・文化といったコンテクストに学習内容は影響を受け、語られぬものが常にそこに存在しているということを忘れないようにする。それはこれから世界の様々な場所で学びを得ようとする自分にとって大事な観点だ。

先ほど読み進めていた書籍の中では、パウロ・フレイレとジョン・デューイの思想を参考にしている部分が多く、改めて二人の思想の中に発達理論の本質的な考え方が存在することに気づいた。フレイレはまさに意識の発達モデルを提唱しており、それは三つの段階を持つものであり、最も高次な段階は、私たちが社会の構造的な問題を見通すことを可能にする批判意識を司るものだとしている。この意識特性については、一昨年、ないし昨年から強く関心を持っている。

フレイレが述べる批判意識について端的に述べると、それはある問題にアプローチする際に、まずはその問題の歴史的なコンテクストを紐解き、それによって浮き彫りになった事柄を再度現代社会のコンテクストに関連付けていく思考形態のことを言う。言い換えれば、社会化された価値に対して、それが社会化された歴史的プロセスを辿り、その価値を取り巻く現代社会の問題を透徹した眼差しで再検証することを可能にする意識だと言えるだろう。

昨日の日記でも述べたように、本来成人発達理論やインテグラル理論の知見というのは、社会化された既存の価値を再検証するために発揮されるべきものなのだが、現在の状況はそれと真逆のことが行なわれているように思えてならない。

昨日も言及した「ティール組織」の枠組みの本質には、成人発達理論やインテグラル理論の思想が横たわっており、それは本来、企業社会における諸々の社会化された価値──ないしは虚構の価値──を解体し、新たなものに変容していくために活用されるべきものなのだが、現状は全く逆である。価値の解体と変容を促すどころか、既存の価値を強固なものにし、虚構に虚構を上塗りするような形で用いられてしまっている。私はこの点について強い問題意識を持っており、それは強まるばかりだ。人々がフレイレの発達モデルで言うところの批判意識を獲得、ないしは着実に涵養してい

けるような成人教育の枠組みは不可欠のように思えるが、その実現はとても険しく思えてしまう。フローニンゲン：2018/12/20（木）15:37

3554. 浅薄さの氾濫する現代社会

時刻は午後の七時半を迎えた。たった今、夕食を摂り終えた。夕方から雨脚が強くなり、今も雨が降り続けている。闇夜の世界に雨が降り注ぐ様子は幾分趣深い。

今日はそれほど気温は低くないはずなのだが、日中足元から冷える感じがした。少しばかりヒーターの温度を高めにして一日を過ごした。

本日は作曲実践を十分に行い、それでいて教育哲学に関する探究も行った。また、計画通りに作曲理論のまとめノートを読み返すことも行っていた。

本日読んでいた教育哲学に関する書籍について改めて思い出している。中でも、パウロ・フレイレの言葉の中に、私たちを縛るものからの解放は、現代社会に対する内省とそれを変容する実践によってもたされる、という類のものがあった。

人はよく自己内省を行うことによって自らを縛るものから解放されようとするが、おそらくそれでは不十分だと言えるだろう。フレイレが指摘するように、私たちを縛っているものは自己及び自己を構築している社会そのものであるのだから、自己のみならず、内省の矢を社会に向けていくことは不可欠である。そして、解放と変容は表裏一体の関係にあるがゆえに、自己を解放していくためには、自己及び社会の変容が不可欠となる。そのようなことを考えていると、世の中で行なわれているほとんどの内省実践は、自己に解放をもたらすというよりも、逆に自己に新たな束縛をもたらすものに成り果てているのではないかと思ってしまう。

さらには、本来自己を変容させていくことを目的にしている内省実践が、気がつけば自己肥大化現象を生み出すものに成り果ててしまっていることも気がかりだ。内省実践を懸命に行っている多くの人たちを見ていると、そうした新たな自己束縛、そして自己肥大化現象に陥っているように思えてくる。この社会は本当に本末転倒なことが多い。

夕方の日記の中で、フレイレが意識の発達モデルを提唱していることについて言及していたが、書籍の中でもう一人取り上げられていたジョン・デューイも発達理論に通じる思想を持っていたことに改めて気づく。

そもそも、デューイはジョージ・ハーバート・ミードと親交があり、ミードの発達思想に少なからぬ影響を受けているのだろう。本日読んでいた書籍の中で、デューイは、教育支援者の重要な役割の一つとして、学習者の経験と学びの構造を把握することを挙げており、これはまさに学習者の発達段階を把握することの大切さを説いているものだと言える。

教育者、さらには教育研究者の中には、発達段階という概念を頭ごなしに否定する人たちがいるのだが、彼らは学習者の経験と学びが持つ構造を否定しているということになる。経験や学びのプロセスに存在する構造的な特性を把握せずして、一体どのように学習者に関与していくことができるのだろうか。

発達段階を否定する教育関係者は、学習者を「ありのままに見る」ことを強調する傾向にあるが、経験や学びが不可避に持つ構造特性を見過ごしてしまうことはありのままに見ることなのだろうか、と疑問に思ってしまう。ここでも浅薄な対象理解がなされているように思える。「ありのままに見る」という言葉は聞こえはいいのだが、物事のありのままを捉えることは常に至難の技であり、それはほぼ不可能である。

ありのままに学習者を見ることを主張する人たちは、自らのその言葉に囚われる形で認識のレンズが曇り、結局学習者を限定的な視点でしか見ることができなくなってしまっているように思える。そこに発達理論の観点が欠けているというのは、まさに限定的な視点で対象を見ていることの表れだろう。現代社会は、いかなる分野においても浅薄さが氾濫している。窓に打ち付ける雨を眺めながら、そのようなことを考えていた。フローニンゲン：2018/12/20（木）19:53

3555. 発達と美的感覚の変容

今朝は六時過ぎに起床したが、早朝に諸々の雑事をしていたため、一日の活動は七時を迎える頃から始めた。昨夜に引き続き、今朝も雨が降っている。ただしそれは激しい雨ではなく、窓ガラスに雨滴が少し付着するほどの小雨である。

今日は土曜日だと思っていたのだが、実際には金曜日らしい。今日は昼食時に、現在北欧諸国に留学している学生と会って話をすることになっている。この半年以上、かかりつけの美容師のメルヴィン以外とは誰とも対面で話をしてこなかったので、今日は貴重な機会だと思う──そういえば、三ヶ月前にボストンに足を運んだ際に、何名かの方たちと話をさせていただいたことを忘れてはいけない。面会の時間以外は普段と変わらず、探究活動と創造活動に取り組んでいきたい。一昨日と昨日にかけて、教育哲学に関する書籍を読み進めていった。

今日はエリオット・アイスナーの書籍を読もうと思っていたが、時間があまりなければ、それは明日に回そう。その代わりに、作曲理論のまとめノートを読み返すことを積極的に行いたい。

時刻は七時を迎えたためか、通りを走る車の量が増えているように思う。車が水しぶきを上げて走る音が聞こえて来る。そういえば、ここ数日間はずっとスクリャービンのピアノ曲を聴きつづけている。数日前の日記で書き留めたように、スクリャービンの音楽が持つ美しさがようやく見えてきた。今はその虜になっているような状態であり、一日中スクリャービンの音楽を聴いている。何を美しいと思うのかという感覚的な変化はまさに、自己の変化の証に違いない。

私たちは、内面が成熟をしていけば、美しいと感じる対象に変化が見られるのは自然なことであり、ある対象に対して美しいと感じる度合いもさらに深まっていくのだろう。

アーノルド・ショーンバーグやオリヴィエ・メシアンなどの作曲技法には関心があるが、今のところまだ彼らの音楽に美しさを感じることができていない。この点については、以前音楽に造詣の深いオランダ人の友人に相談したことがある。ショーンバーグやメシアンの曲に美を見出す日がいつかやってくるかもしれない。そのためには、自己をより深めていくことが必要になる。

欧州での生活が進むにつれて、私の内面は随分と変化したように思う。成人期以降、最初に大きな変容を経験したのは、確かにアメリカでの生活がきっかけだったように思う。アメリカで過ごした四年間は、自分を大きく変容させたと思う。そこからさらに欧州で三年ほど生活をしているが、この期間に体験した変容は、アメリカで経験した変容以上の意味と深さがあるように思えてくる。美的感覚を含め、内側の諸々の感覚が変わってしまった。それはとても肯定的な意味においてである。

© YOHEI KATO 2018

発達とは、既存の内的感覚を深めていくものであるのと同時に、新たな感覚を開くものでもあるのかもしれない。まさに発達(development)の語源に「開く(拓く)」という意味があることを実体験として感じる。雨の降りしきる今日という一日を、また一歩自己を深めていくために充実した形で過ごしていきたい。フローニンゲン:2018/12/21(金)07:12

No.1497: An Iron Hammer to the Modern Society

I suppose that the future of our society will come after many parts of the society are destroyed by an iron hammer. Groningen, 22:01, Friday, 12/21/2018

3556. 成田空港近くのトランクルームに行く夢

時刻は午前七時を回り、雨脚が少し強まったように感じる。午前中いっぱいは少々雨脚が強いままかもしれない。昼前には少し雨脚が弱まってくれるようであり、昼からの面会に向けてそれは有り難い。

窓ガラスに雨がポツポツとぶつかる音を聞きながら、今朝方の夢について思い返していた。夢の中で私は、成田空港にいた。ちょうど欧州のどこかの国から日本に一時帰国したようである。宿泊先のホテルは都心にあるため、空港から高速バスに乗って移動するか特急列車に乗るかを考えていた。

空港のエスカレーターを上がっている時に、携帯電話が振動し始めた。見ると、母からの電話だった。電話を取り、母と少しばかり会話をした。その会話の途中あたりで、母が突然、ある話を切り出した。なにやら、成田空港近くに実はトランクルームのような部屋を所持しており、確かにそこは狭いが、寝泊まりができないわけではない、ということを教えてくれた。私はそれまで、母がそのような物件を所持しているとは知らず、少々驚いた。

話によると、母が会社に勤めていた頃、その会社の社長か副社長がその物件を無料で譲ってくれたとのことである。確かに私は、すでに宿泊先のホテルを決めていたが、そういえば予約をし忘れていることに気づき、母が所有するそのトランクルームで今日は寝泊まりをすることにした。母にその

住所を聞き、私はそこに向かった。その部屋に到着してみると、確かに広くはないが、物を置くだけではなく、人が寝泊まりすることが十分に可能だと思った。

一般的なトランクルームは物を置くためだけのスペースしかないだろうが、その部屋にはキッチン、トイレ、そして風呂まで完備されていた。私は部屋の押し入れの扉を開け、そこに母のいくつかの所有物、そして寝泊まり用の布団が置かれているのを見た。母の持ち物を確認してみたところ、それが何かよくわからなかったため、元あった場所に戻し、私がふと振り返ってみると、そこには学習机が置かれていた。机の本立てには、私が過去に所有していた何冊かの書籍が置かれていた。

見るとそれは、日本の大学に通っていた頃に学習していた会計学や金融に関する専門書だった。私は懐かしくなり、それらの書籍を手に取り、中身をパラパラと眺めた。すると再び携帯電話が振動し始め、見るとそれはまたしても母からの電話だった。

母:「無事に着いた？」

私:「うん、着いたよ。それにしてもこんな部屋があったとは驚きだね」

母と私はそこでも二、三やり取りをした。部屋の窓から外を眺めると、住居が密集している都心の光景が広がっていた。家と家の間に植えられた木々が妙に侘しげな感情を引き起こす。

母との会話が終わり、私はその部屋を後にしようと思った。次の目的地に向かうために、現在位置からそこまでの道筋を確認する必要があり、携帯の地図を開いた。すると、地図の表示がおかしくなってしまったのか、今自分がいる場所は西東京の分倍河原を示していた。その家は成田空港の近くにあるはずなのにおかしいと思ったところで、夢の場面が変わった。フローニンゲン:2018/12/21(金)07:32

No.1498: An Incessant Rain

It has rained since the early morning. It seems to be a cold rain. Groningen, 09:14, Saturday, 12/22/2018

3557. 半年振りに人と会うことについて

たった今、一日分のコーヒーを入れ始めた。数ヶ月前より、一日に飲むコーヒーの量は随分と減り、午前中に一杯、午後に一杯だけとなった。

今日は午後に、北欧諸国に留学中の学生と話をする予定になっており、昼食を済ませたらカフェにでも行ってさらにゆっくりと話しをしようと考えていたため、今日の午後用のコーヒーを作る必要はなかったのだが、いつもの癖で、二杯分のコーヒーを作り始めてしまった。習慣の持つ無意識的な力について考えさせられる。

コーヒーを作りながらふと、やはり私が人と対面して話をするのはもう何ヶ月ぶりかのことだと思った。最後にフローニンゲンで人と話をしたのはもしかすると、六月ぐらいに、論文アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授とカフェで研究について話をしていた時だったかもしれない。そう考えると、半年ほど誰とも話をしない状況が続いていたことになる。確かに、普段の協働プロジェクトを通じて、協働者の方たちと話をすることはあるが、それらはすべてオンラインを通じてだ。対面で話をするのは本当に久しぶりだ。このように、人と会う機会が減っていることは、私にとって大変喜ばしい。煩わしい人間関係から解放され、この人生で自分が取り組むべきことに邁進していることを改めて実感する。

私が日本で生活することを控える理由の一つは、人と会わざるをえない状況が生まれることにあり、今はそうした煩わしさからほぼ完全に解放されている。人と会わないということは、何も自分の世界に閉じこもることを意味しておらず、また、人との交流を蔑ろにしているという意味でもない。私が極力避けているのは、無意味に人と会って話をすることである。今後もこうした生活の送り方を徹底していこうと思う。

今朝方はもう一つ夢を見ていた。夢の中で私は、小中学校時代を過ごした社宅の部屋にいて、そこで小中高時代の女性の友人二人と話をしていた。一人の友人が私に対して、「この五年間でずいぶん男性性が強くなったね」と述べた。彼女が述べたことの意味を確認してみると、どうやらそれは内面における男性性の話ではなく、単に外見上のことだった。彼女曰く、五年前の私は随分と細

身であったが、今は肩幅が広くなり、胸板が幾分厚くなっているとのことだった。そうした話を含め、しばらく雑談をしていると、もう一人別の女性の友人が部屋にやってきた。

私はなぜだかわからないが、彼女にパウダー状の黒炭の飲み物を勧めた。それは宿便を取り除いてくれることに効果的な飲み物であり、私は彼女に試しに一回飲んでみるといい、と述べ、一回分の黒炭のパウダーが梱包されたものを渡した。彼女は嬉しそうにそれを受け取り、「試しに飲んでみる」と笑顔で述べた。そこで夢の場面が変わった。

今朝方の夢に関して覚えているのは、上記の夢と先ほど書き留めた夢の二つである。実際には、その他にも夢を見ていたように思うが、覚えているのはそれら二つだけだ。書き留めた夢について、自分なりにその意味を解釈しようと思ったが、今回の夢はなかなかそれが難しい。夢を想起する力は間違いなく高まってきているため、ここからは、夢の中のシンボルを解釈する力を高めていきたいと思う。フローニンゲン：2018/12/21（金）07:56

No.1499: Time for a Cold Wind to Come

I can see a depressive rain-cloud and a cold rain. The coldness of this winter will become severer and severer. Groningen, 13:55, Saturday, 12/22/2018

3558. モネの絵画から得られた着想

しとしとと小雨が相変わらず降り続けている。早朝に雨脚が強まったり弱まったりを繰り返し、今は引き続き小雨がフローニンゲンの街に降り注いでいる。

今日はこれから、久しぶりに人と会う約束がある。もう三十分ほどしたら支度を始め、12時に待ち合わせ場所の大学のメイン図書館に到着するように自宅を出発しよう。

今日はすでに二曲作った。午前中に二回ほど作曲実践ができるということは至福である。早朝の雰囲気が醸し出す滑らかな曲線的な感覚を曲として表現した。幾分丸みを帯びており、滑らかな感覚が自分の内側に走っていたので、それをそのまま曲にした。

昨夜は就寝前に、ロンドンのナショナルギャラリーで購入したモネの画集を眺めており、モネの筆使い、そして色彩感覚に大きな感銘を受けた。ナショナルギャラリーの特別展示で見た、モネの数々の名作に関する記憶がありありと蘇ってくるかのようであった。そこで思い出されていたのは、その時に自分が感じていた内側の感覚であった。そうした感覚を思い出しながら画集を眺めており、それもまた至福の時間であったと記憶している。

モネの画集を眺めていると、ふと、モネの色の混ぜ方から着想を得て、音を色彩豊かに混ぜていく方法について考えていた。数ヶ月前より、色鉛筆と水筆ペンを用いて絵も描き始めており、絵筆で複数の色を混ぜながら色を伸ばしていくのと同じような感覚で、複数の音を混ぜ、なおかつそれを伸ばしていく方法について考えていきたいと思った。

簡単な方法としては、和音とペダルを用いることだろう。だが、そこからさらに研究をしていきたいのは、どのような音を和音として組み合わせ、それを次の別の和音にいかように混ぜたらどのような音の響きが得られるのかということである。さらには、筆で色を伸ばす際に、二つの色をどれだけ混ぜるのかのさじ加減があるように、音を伸ばして混ぜる時のさじ加減についても研究していきたい。これらは確かに理論的に研究が進んでいるだろうが、どれも実践を通じて自分の身体感覚を通じて研究していきたい。

真に実践に足る知識とは、自分の内側を一度必ず通過させなければならず、理論化されたものをさらに自分で理論化していくことが重要になるだろう。言い換えれば、すでに誰かによって言語化されたものを自らの身体感覚を通じて再言語化していくことが重要になる。

それにしても、モネの作品は本当に傑作が多い。確かに私は抽象画を好む傾向にあるが、モネの作品のように、誰が見てもそこにある一定程度の美を感じさせてくれる「親切かつ深い美」が持つ価値は多大なものがあるように思える。幸運にも、ロンドンのナショナルギャラリーでモネの作品を数多く見ることができ、数ヶ月前に訪れたボストン美術館でもモネの作品を多く見ることができた。モネの絵画作品を含め、自分が好む画家の絵から着想を得る形で曲を作っていきたいという思いが高まる。普段の作曲実践の中で無意識的に行っていたことに言葉を与え、そこに再現性を持たせる形で作曲の探究を進めていこうと思う。フローニンゲン：2018/12/21（金）11:12

No.1500: Repose of a Phoenix

It rained all day long today; even so, I continued to feel a mysterious tranquility. Groningen, 17:57, Saturday, 12/22/2018

3559. 充実感と幸福感のその先

今日もまた、自分の人生のある一日が充実感と幸福感に包まれる形で終わりに向かっている。いや、ここ最近の私は、もはや充実感と幸福感という感覚を超越し、それら二つが混ぜ合わさったような感覚の中で日々を過ごしている気がする。そうした感覚をなんと呼べばいいのか今の私には「まだ」わからない。まだわからないというだけであって、そうした感覚が自己の内側に生じていることに気づけた瞬間に、その感覚にふさわしい言葉がいつか降ってくるだろう。

先ほど入浴をしている最中も、その感覚について考えていた。それについて考えていると、よく分からないが自然と笑いが込み上げてきた。笑みを浮かべながら私は、充実感と幸福感が混じり合った感覚に包まれる形でそれについて考えていた。こうした感覚を発見できた瞬間に、もしかしたら私は自分の内側に宿る内在神ないしは仏性に目覚めたのかもしれないと思った。

時々私は、自分はどのように生涯を閉じるのかについて考えることがある。端的にはいかように死ぬかという話である。人生はいついかなる瞬間も何が起こるのかわからないが、私は120歳か130歳あたりに、ある日あまりにも面白い現象に出くわし、大笑いした瞬間につまづいてしまったり、肋骨が折れてしまったりすることがきっかけになってこの世を去っていくのではないかと考えることがある。あるいは、人生そのものがやはり冗談であったということ、ないしはあまりに真剣な冗談であったことに気づいた瞬間に大きな笑いがもたらされ、その拍子に足を滑らせたりするか何かして、生涯を閉じていくように思えることがある。

今日も入浴中にそのようなことを思っていた。入浴中に面白い気づきや考えが降ってくることはよくあることであり、それが今の自己を超越していく運動を伴うものであればあるほど、その気づきや考えが内包する笑いは大きくなる。浴槽でそうした笑いに囚われて、足を滑らせてしまうことは今の年齢でも危険であるから、今後は少々気をつける必要がある。そうしたことを改めて考えていた。

今日は半年ぶりに人に会って話をした。北欧諸国に留学中の東京大学の学生が、今日はわざわざフローニンゲンに足を運んでくれ、街のレストランとカフェで五時間ほど話をした。インドネシア料理、イタリアン、ベトナム料理に関して行きつけの店があり、今日は私がよく足を運ぶインドネシア料理店で昼食を摂り、その後、フローニンゲン大学のメインキャンパス近くのカフェで話をした。彼女と私はおそらく、干支がひとまわりぐらい離れていると思うが、五時間の会話はとても楽しく感じられた。カフェが五時半あたりで閉まることがなければ、もっと話をしていたように思う。

彼女は私と同じく教育に関心を持っており、彼女の話の中には、考えさせられることが多々あり、それらについては今後の日記の中で形を変えて書き綴っていくことになるだろう。彼女との会話、インドネシア料理店の気さくな店長とのやり取り、店で注文待ちをしていたオランダ人の男性との会話、カフェの店員とのちょっとしたやり取り、帰りに立ち寄ったチーズ屋の店主との会話、そうした諸々の会話が、幸福感の塊であるように思えるのは何らおかしなことではないだろう。

チーズ屋からの帰り道、運河に浮かぶ何艘もの船が、クリスマスのイルミネーションに飾られ、様々な色の光を発していた。やはり人間の人生は光であり、冗談なのだと思う。それに気づけた時、人生というものが実は光と冗談を超えたものであることがわかるだろう。そのようなことを思いながら、イルミネーションに飾られた船を眺め、そして暗闇の中を歩いて自宅に戻った。フローニンゲン：2018/12/21（金）20:12

3560. 精神の圧縮と解放

今朝は六時前に起床し、六時を過ぎた頃に一日の活動を始めた。とても静寂な闇が外の世界に広がっている。この瞬間のフローニンゲンには雨が降っておらず、ただ静寂な闇だけがそこにたたずんでいる。天気予報を確認すると、今日は午前中から雨が降り始め、夕方に止むようだ。雨が止んだ時に夕日が見れるのかというとそうではない。

もう四時を迎えると暗くなり始めている今日この頃において、今日は太陽の姿を拝むことは期待できない。日照時間が短くなる極地に向かって季節が進行している。これからようやく厳しい冬がやってくる。今年は随分と暖かいと思っていたが、もうそろそろ本格的に寒さが厳しくなるだろう。とはいえ、昨日ぐらいから室内の気温も下がってきたようなので、ヒーターの温度を高くしたりと、それなりに本

格的な冬の到来を感じている。だがそれは、あの過酷な冬の前ぶれ程度でしかなく、これから始まる厳し冬が待ち遠しい。

そこでは再び精神が圧縮され、圧縮からの解放がやってくるはずだ。北欧諸国の国民たちの幸福度は高いと言われており、彼らの生活の有り様を見ていると、確かにそうかもしれないと思うことはあるが、意外と北欧諸国の自殺率が高いことが気にかかっていた。

最近思うのは、確かに長く厳しい冬の時期に、これだけ日照時間が短くなれば、脳内からセロトニンがあまり分泌されなくなり、抑うつ的な気分になるのもわからなくもない。実際に、私もフローニンゲンで生活を始めた最初の年は、それに類するような状態に自分が陥りそうになっていることに気づいていた。そう考えてみると、太陽という存在が生命にとってどれだけ大切なものなのかがわかってくる。この時期は、太陽の光が本当に貴重であり、太陽が降り注ぐ方向に自分が伸びていこうとするような感覚にすらなる。

こうした環境下で精神が鍛錬されていくというのは文字通り、自らの意識が太陽の方向に伸びていっているからなのではないかと思ってしまうほどだ。精神を圧縮する厳しい冬の到来を待ちわびている。昨年同様に、今年の冬に向けた精神的準備はすでになされている。それを受け入れる準備はすでに整っており、むしろその到来をもってして、再び自己が新たな方向に歩き出すだろう。太陽の方向にまた一歩、歩みを進めていくにちがいない。

昨夜ふと、こういう雰囲気の季節だからか、短調の曲を多く書いている自分がいることに気づいた。いやはや、こうした自然環境から喚起される自らの精神を色濃く反映した曲が自然と生まれてくるような状況になっている。

もちろん、短調の曲が必ずしも暗いものだとは言えないのだが、そうだとしても短調の曲にはどこか暗さや冷たさのような感覚を引き起こす性質が横たわっている。無調の曲もどこか神秘的な──ないしは不気味な──響きを持つものが多いが、今の私は無調の曲を書く技術はなく、調性のある曲を書いている。そうなってくると、北欧に近いオランダのこの街が発する雰囲気に影響を受ける形で、自然と短調の曲を書くことが多くなっているのだろう。これは短調の曲を多く書く良い機会になるだ

ろう。この機会の恩恵を受けて、世界の暗黒部の深淵を眺めるような曲を作っていく足がかりを得たい。フローニンゲン：2018/12/22（土）06:40

No.1501: Dinner of an Imp

An imp finished having dinner. I feel as if I shook hands with the imp, saying good-bye. I'll study compassion theory a little bit and then go to sleep. Groningen, 21:13, Saturday, 12/22/2018